

日中友好新聞

京都府連版

第328号

日中友好協会京都府連合会

〒602-8026 京都市上京区新町通丸太町上ル
TEL&FAX 075-256-2764 nichukyoto.com

機関紙会館ビル302号
info@nichukyoto.gr.jp



ウクライナに平和を！カテリーナコンサート開催
母なる祖国の歌とバンドウーラの音色に魅せられて

十月六日夜、京都教育文化センター大ホールにおいて、国際友好団体が実行委員会を構成して臨んだ「ウクライナに平和を！カテリーナコンサート」が開催され、カテリーナさんの澄んだ高音が歌い上げるコサツクの伝統につながる母なる祖国の歌声と、バンドウーラの音色が会場に響き渡りました。二時間の弾き語りの中でカテリーナさんはウクライナの古典及び現代の歌、「涙そうそう」「上を向いて歩こう」など日本の歌、それにオリジナル曲など十数曲を披露し、またバンドウーラという楽器の特徴について語りました。会場を埋めた二五〇人の聴衆の中にはウクライナの音楽は初めてという人も多く熱心に聴き聞いていました。(二面につづく)

一日遅れの「中秋節」 大山崎班

九月三十日、大山崎町での集いに、秋の草花と八人が参集しました。初めにクイズ、日本では月にウサギがいるが、中国人は何がいると考えるか？というわけで、伝説中の「嫦娥」のお話。そして新疆・ウイグルの話へ。

大阪総領事館主催のツアー第二陣に参加した井手啓二さんが報告。以前に訪れた新疆北部と、今回の、オアシス都市が連なる天山南路との違いや、豊富な果物、広大な砂漠の農地化・緑化、砂漠の地下にある豊富な水源、カレーズ等々。

綿作の農場や工場、学校訪問もあり、日程が詰まっていたこと、昨今の世の中の反映なのか、駅やホテルで新聞・雑誌を見かけなかった不満はありつつ、やはり行って良かったということでした。

第一陣に参加の山副さんも、スマホでこのツアーの様子を確認していたこと、今の海外旅行にはスマホが必須である。また新疆・ウイグル地域での漢族の増加は、ウイグルその他の少数民族との関係を複雑化させ、宗教は私たちになかなかわかりにくいものがあるとの声も出されました。

短い時間でしたが、次回は春節だと確認して家路につきました。

(井手 淑子)



はじめに主催者を代表して挨拶した田中宏・日本ユーラシア協会京都府連合会会長は、今回の催しは日本ユーラシア協会、日中友好協会、日本ベトナム友好協会、日朝協会、アジア・アフリカ・ラテンアメリカ連帯委員会という京都の国際友好団体が共同で準備したのですが、現在の世界情勢に鑑みるとき、これらの友好団体が共同で、音楽を通じてウクライナの平和を訴えることには大きな意義がある。さらにこの五団体は今日世界的に存在感を高めているグローバルサウスを対象にして交流活動や情報発信を行っており、この点にも大きな意義があると述べました。

公演を終えた後、木屋町のレストランでカテリーナさんと実行委員会メンバーで夕食を共にして懇談しました。その際にカテリーナさんが語ってくれた経歴です。四歳から歌のレッスンを始め、六歳で「チエルボナカリーナ」に入団、芸術大学で学び、さらに専門機関でも修練を積む。公演で来日した日本に魅せられて、その後、音楽活動の拠点を東京に移す。ウクライナ戦争が始まってからはテレビなどに出演する機会が増えて、現在は年間三百のステージで演奏している。ウクライナのために今、私にできることは平和のために歌うことだけですが、二人のいとこをはじめ親族で五人が戦場で戦っている。彼らのことが一番心配です。淡々と語る表情が戦場にある親族に触れた時だけ深い憂いに曇りました。府連は独自に六十枚近いチケットを普及しました。奔走してくれた会員、そして協力していただいた会員外の皆さんに心からお礼申し上げます。

(齋藤 敏康)

***因みに手元にまだ金券を持っている人は事務局まで返却をお願いします。

参加者の感想

・ウクライナの民族楽器バンドウーラを初めて聴いたのはYouTubeを通してでした。たくさんの弦を奏でて響く音色はとて深く優しくていっぺんに好きになりました。今回日中友好協会のあつせんでそのバンドウーラの生の演奏が聴けるとあって喜んで申し込みました。カテリーナさんのしなやかな手さばきから生まれる音はいくつかの楽器による演奏のよりに聞こえ、また美しい歌声とともに大変良い時間を過ごすことができました。(M.C)

・コロナで引きこもりの期間が長かったので久しぶりの夜のお出かけの時間はとても新鮮でした。(F.M)
・以前に聞いたことのあるナターシャ・グジーさんの演奏の時はバンドウーラの音色がもつと響いて聞こえたので、今回はカテリーナさんの歌声が力強すぎて、せつかくの楽器の音が負けてしまっていたのが残念でした。(H.H)

・京都の国際交流五団体が共同してこのような催しを実行できたのは素晴らしいと思う。欲を言えばウクライナの現在の状況、カテリーナさんのご家族の状況などをもつと語ってほしかった。アンコールの歌曲にはバンドウーラの伴奏が欲しかった。(K.Y)
・歌われた曲には「母」を歌う曲が多かったが説明によればウクライナの歌曲の七十五パーセントはお母さんを歌ったものなのだそうだ。バンドウーラというウクライナの民族楽器を初めて聞いたが、琵琶のような形で弦が六十五本もあり、重さは八キロもあるという。今や、楽器を作る人たちも戦争に出ていてこの楽器の作り手がいなくなるかもしれないとのこと。ウクライナの民族の誇りともいえるべき楽器の存続を心から願う。(G.H)

・カテリーナさんの美しい歌声とバンドウーラのロマンチックなサウンドにすてきな夜を過ごすことができました。一日も早く世界中が平和になることを祈っています。(A.S)

***日本之旅 徐力涛** 在日本生活的这一年的时间里，从“日本三景”的松岛到JR最南端的西大山站，我走过了许多的地方。同时完整地感受了一遍日本的四季，春天吉野山的“一目千本”，夏天祖谷的绿意盎然，秋天贵船神社的月下红叶，冬天富士山、北陆群山的宁静壮丽……毫无疑问，日本是一个美丽的国家。

沉浸其中，我更加深切地体会到和平的珍贵，正因为有着和平的大环境和良好的社会秩序，才能让我这么一个来自中国的普通人可以利用便利的公共交通，悠然自得地感受这一份宁静与美好。

今年的集会我穿着与去年参加集会时一样的衣装，虽然衬衫上有了点破损，但对和平的追求与去年是一致的。破损可以修补，我坚信就像衬衫上有着明亮的黄色一样，这个世界上追求的和平的力量可以让世界拥有一个明亮的未来。

***日本の旅 徐力涛** 日本で生活したここ一年あまりの間、「日本三景」の松島から、JRの最南端の西大山駅に到るまで、私は、数多くの場所を訪れた。と同時に、私は、日本の四季にすっかり心を奪われた。春は吉野山の「千本桜」、夏は祖谷の万緑、秋は貴船神社の月下の紅葉、冬は富士山、北陸群山の静寂な壮麗さ……疑いもなく日本は美しい国だ。その中に浸りながら、私はさらに深く平和の尊さを感じることができた。それはまさに、平和な環境と良好な社会秩序があり、私のような中国から来た一般人でも、便利な公共交通を利用でき、のんびり満ち足りて、安らかさと美しさを感じることができるからだ。今年の集会で、私は、去年と同じ服を着ていた。シャツに少し破れがあったが、平和を求める気持ちは去年と変わっていない。破損したら修復すればよい。このシャツの明るい黄色と同じように、この世界で平和を求める力が、世界に明るい未来をもたらすのだと、私は堅く信じている。(日本語訳 西田)

京都きりえ展が開催されました

八月二十九日～九月三日、京都市美術館別館で
京都きりえの会主催で「京都きりえ展」が開催さ
れ、数々の力作が展示されました。



〈今時の焦点〉 パレスチナ情勢と世界的な憎悪の連鎖を憂慮する

私たちはウクライナ戦争勃発直後にロシア軍によるブチャでの惨たらしい住民虐殺を見たが、今またガザ地区では病院が爆撃され患者、医療関係者、避難民ら五百人余りが死亡したと報道されています。発端となったハマス地上部隊によるイスラエルへの侵攻によっても住民居住地域が襲撃され、キブツなどの施設が破壊されたといわれています。

文学者の岡真理さんはイスラエル・パレスチナ紛争をめぐっては、世界のメディアに向けて組織された緻密な情報戦が歴史的に展開されている、そのため情報の真偽を確かめるクリティックが徹底的になされなければならぬと述べています。ハマスの住民虐殺やキブツ襲撃は真実なのか、今後時間をかけた究明が必要でしょう。ガザのアフリアラブ病院の爆撃については、イスラエルもハマスも自分たちの犯行ではないと言っています。誰がやったにせよ明確な戦争犯罪、人道に反する常軌を逸した犯罪であることに変わりはありません。仮に今後何年かかろうとも正確な調査によって犯罪者が裁かれなければなりません。

ウクライナ情勢にも変化が表れており、ロシアが、パレスチナの戦闘を横目で見ながら東部戦線で大規模な攻撃を仕掛けているという情報もあります。戦争の長期化でグローバルなヒト・モノ・情報の移動と交流が阻害され、アフリカで食糧危機が起き、ヨーロッパではエネルギー不安が高じています。こうした世界システムの不安定に乗じて、憎悪を煽り、暴力を誘発し、戦闘を激化させようとする力学が世界的規模で働き始めています。東アジアにおいても偶発的な衝突の危険性が高まることが懸念されます。

このような状況であればこそ、私たちはあらゆる戦闘の即時停止、平和的交渉を訴えなければならぬでしょう。殺人、殺戮はやめよと声を大にしていなければならない。

イスラエル・パレスチナ紛争をめぐって、中国は双方に自制と話し合いを呼び掛けています。しかし他方で、十月十八日、習近平国家主席とプーチン大統領は北京で会談を行い、経済をはじめとする両国関係の強化を確認しました。中国からヨーロッパに輸送されていた物資の九十%が、ウクライナ戦争が始まってからはロシアに向けられています。他方、西側諸国、特にアメリカはロシア、中国、パレスチナへの攻撃と制裁を強めています。このようなグローバルな対立と分断が平和に対する危機を深めていることもまた言うまでもありません。

「疎隔」という言葉があります。辞書的には「相手を嫌って遠ざけること、親しみがなくなり隔たりが生じること」ですが、国際関係を説明するれっきとした専門用語でもあります。国家間で疎隔が生じると互いに相手の行為の意図を測りかねて、より威圧的な措置で対処しようとする。また相手への依存を避けて、政治・経済ブロックを構築しようとする。そして相互に武力抑止的行為によって安全を確保しようとする傾向が強まり、協力という最適解から遠ざかっていくことを指しています。

パレスチナやウクライナの情勢が導きかねないグローバルな負のスパイラルを回避するためには国連による積極的な関与が期待されますが、それが有効に機能しない現状にあってはグローバル・サウスや西欧による仲裁に向けたイニシアチブが望まれます。日本もまたそうした方向で積極的にコミットするべきでしょう。

(康)

『繁花』聖地巡礼の旅(1)

石橋美紀(中国語教室・火曜日受講生)

九月十四日から二十三日まで上海、蘇州、杭州と十日間の旅をしてきた。

若者たちの間では、マンガやアニメのゆかりの地を訪れることは「聖地巡礼」と呼ばれている。そういえば夏に諏訪大社へ行った時、東方プロジェクトというゲームのキャラクタを描いた絵馬が、たくさん奉納されていた。その中には中国の若者たちのものもあった。

さて、今回の中国旅行の一番の目的は、現代文学講読クラスのテキスト『繁花』の聖地巡礼を行うことだった。この小説はクラスの浦元里花先生が翻訳されたものであり、物語の中には作者 金宇澄の子供時代とおぼしき上海の一九五〇年代の街並みがたくさん出てくる。

地下鉄駅から降り立って、正面に「国泰電影院」が目に入った時は思わず、やった、と叫んでいた。主人公が映画のチケットを取るために並ぶという描写を先日読んだばかり。「国泰電影院から錦江飯店まで列が伸びている」と書かれた場所がここである。近くには大きな花園飯店があり、そこから曲がっていくと、古いアパートの続く街並みもある。ここに著名な漫画家 豊子愷の家があるが、展示室は閉鎖されていて残念。

中心部に戻って、ニコラス東正教堂の見える主人公たちの家を探した。孫文記念館からもほど近く、昔は高級住宅地だったことがわかる。子ども二人が

屋根の上で空を見ていた家はどこだろう。東正教堂は、素敵な本屋になっており、そこから真東、通りを挟んだ古い家がこれだろうかなどと、ウロウロと候補となるいくつかの家を見ながら、写真と動画を撮りまくった。

翌日は「蘇州河」というクリークに行った。西康路橋を渡った対岸の古い建物は小説に出てきた穀物倉庫の名残であるらしい。これは帰国後写真を見てもらってわかったことだ。

小説で読んだ五十年代上海の街並みを探して、市内バスに乗って、あちらへこちらへと巡っていくのは、本当に面白い時間だった。漠然と上海の観光地巡りをするよりも、何倍も濃い経験になったと思う。忘れられない上海での四日間だった。

(蘇州・杭州へと旅は続く)



国泰電影院

《中国伝統劇つれづれ》第六回 「揚劇」 藤野真子

上海には江南のみならず、江北(蘇北)出身の人たちも多く暮らしている。かつて筆者は、一九八〇年頃に留学を経験した恩師から「江北出身者の集まっている地区に、その地方劇がかかっている劇場があるはずや」とアドバイスを受けたが、探し方が下手なのか、もはや存在しないのか、とうとう見つけ出すことができなかった。

この江北の代表的な地方劇としては、淮劇(江蘇省淮安、塩城一帯)と揚劇(江蘇省揚州)が挙げられる。どちらも京劇に比べると大衆的で、素朴な味わいを帯びている。上演頻度こそ低いものの、上海に住んでさえいれば、これらの劇を観る機会は年に数回ある。

動画サイトなどない時代、とにかくたくさん観て、たくさん聴かなければと思っていた筆者は、劇場へ足を運ぶ他に、音声・映像ソフトを手当たり次第購入した。そうして入手した中に、揚劇の『喬奶奶罵猫』のカセットテープがあった。女性一人がひたすら唱い続ける劇で、揚劇の祖型の一つである語り物芸に近い。

伝統劇はその種類によって主旋律を取る楽器が異なるが、揚劇の場合は二胡であり、撥弦楽器が脇を固める。『喬奶奶罵猫』を聴いていくうち、明快なメロディーを軸としたシンプルな構成の楽曲に筆者はなぜか魅せられてしまい、しばらくは何をしていても二胡の主旋律が脳内に鳴り響いていた。

実際の上演に足を運んだのは、『喬奶奶罵猫』を脳

内リピートしていた頃より後だっただろうか。ある日、南京東路を北に入った牛莊路沿いにある中国大戲院で揚劇の公演があった。こんなマイナーな地方劇など誰が観に来るのだろうと思っていたら、あにはからんやロビーは人がいっぱい、明らかに呉方言ではない言葉とともに、ちらほら上海語とおぼしき響きも耳に入ってきた。上海で長く演じられたこともあり、一定の愛好者がいるのであろう。

メインの演目名は失念したが、たぶん古装の世話物だった。演じ終わったのは十時前だったが、この日はそれからが本番だった。カーテンコールの後、次々と客席からアンコールの声が起こる。俳優のみならず、楽隊も、いや、むしろ楽隊の方がノリノリだった。揚劇は伴奏だけを聴く公演があるが、やはりあの楽曲には一種の中毒性があるのかもしれない。すべてが終了したときには、すでに十一時を過ぎていた。(ふじのなおこ 関西学院大学教授)



中国の山旅(11) 西谷仁

重慶から武漢まで三峡クルーズに乗った。私の船は一番安いフェリーだったが三日間位大勢の観光客と雄大な長江を楽しんだ。本当は三峡ダムが出きる前の長江の自然を楽しみたかったが時遅しである。



2009も水位が上がったのに両側には高い絶壁がそろう、長江の作った自然の雄大な景色に見入った。途中では支流を逆のぼって小三峡というこれまたすばらしい景色の所へ小型船に乗りかえて行った。食堂はついてない安船なので食事はパンやラーメンで部屋はドミトリだった。三峡ダムにつくとダムの見学につれていってくれた。そこはパナマ運河のように船の水位を上下させてダムに大型船が入れるようにしてあり重慶まで大型船が行けるようになった。海のクルーズと違い川のクルーズは四六時中外の景色を見れるので三日間全く退屈する事はなかった。

コロナ禍の台湾研究活動道中記（第19回） 自主待機期間（その3） 高橋孝治

前回まででお話ししましたように、十日間のホテル隔離期間を経て、やっと台湾で契約した家にたどり着きました。しかし、家に入居しても、二〇二三年四月頃はまだ十日間のホテル隔離が終了した後は、一週間の自宅での自主待機期間となります。この自主待機期間は、生活必需品の購入という理由のときのみ外出することが許され、地下鉄やバスなどの公共交通機関に乗ることもできないという期間です。また、この自主待機期間は、レストランなどに行っても、必ず食べ物を持ち帰りにして、店内で食べてはいけません。

しかし、全く外出ができなかったホテル隔離期間に比べれば、生活必需品購入という理由があれば外出できるため、ある程度は精神的にも余裕がある状態になります。前回までで、家のインターネット接続も完了し早速外出しました。外国で、新しい家に居住を始める際には、湯沸かし器やらトイレトペーパー、布団、コップなどの生活必需品を購入する必要があります。その際、記念すべきこのときの台湾滞在ではじめて自主的に購入した食事は、モスバーガーのレモンバーガー（軽檸雙牛堡）でした。これは、このときより前に台湾に滞在していたときに発見した、台湾のモスバーガーで販売している（日本未発売）ハンバーガーで、非常に美味しく、オススメです。筆者は台湾に行くたびに、レモンバーガーばかり食べていました。しかし、新型コロナウイ

ルス感染症のためになかなか台湾に入国できなくなっており、久しぶりに自主的に台湾で食事を購入できるようになったタイミングで早速レモンバーガーを持ち帰りで購入してしまいました。

持ち帰りでレモンバーガーを購入し、自宅で食べた後は、別に購入した電気の延長コードなどで、湯沸かし器や電気スタンドなど部屋内の電気関係のセッティングをしていました。外国で家に居住をし始めた初日としては普通な日であったと言えるでしょう。（続く）

（2022年台湾フェローシップ採択者／（元）台湾・淡江大学 日本政経研究所 訪問研究員（2022年）
筆者出演のウェブラジオ
<https://id.pfrinet.me/archives/category/id>。



台湾のモスバーガーで発売されているレモンバーガー（軽檸雙牛堡）

谷村新司さんの名曲「昴」と「三峡下り」の思い出 横地 豊

谷村新司さんが十月八日亡くされました。私には彼の代表曲「昴」には格別の思いがあります。一九九五年、中国を楽しむ自前の団体旅行をしたと思い、暗中模索で、元上海の旅行会社員の友人の、つて、を頼って、「三峡下りツアー」を企画しました。ツアー名は中国で愛されている日本の曲から「昴」ツアーとしました。経験もないことでもかなり苦労しましたが、中国語受講生、日中会員の総勢二十五名の皆さんでの楽しい中国旅行になりました。ツアーは维多利亚（Victoria）という外国籍の船で食事と寝泊をして、長江沿岸の観光地に上陸するというゆっくりしたもので、船から壮大な三峡の景色を眺めるとともに船上では太極拳講習会や参加者の自己紹介と演奏会、夕食での誕生パーティーを行いました。そして男性は停泊地ごとの酒屋で、地元の白酒を買いこんでの毎夜毎夜の宴会、女性は武漢のデザートで「瘦せる石鱖」のショッピングを楽しみました。当時は一元二十元（現在は二元二十元）。船の旅最終日には各国の観光客の出し物が披露され、私たちは中国人の友人の歌唱指導のもと「昴」を船内で練習して、合唱しました。歌い終わった時には、皆さんが歌いきった感じで大変いい笑顔でした。それから「昴」を聞くたびに楽しかったツアーのことを思い出します。船でもらったキーホルダーは、二十八年間、今も携帯しています。

心に残る名曲「昴」をつくられた谷村新司さんにあらためて感謝の意を表します。

谷村新司「昴すばる」 中日文歌詞字幕版 YouTube
<https://youtu.be/hsswC9g4gY8?si=ucZrRnREURt4PqCK4>

書呆子 (中国語で「本の虫」という意味)

「関東大震災 文豪たちの証言」石井正巳編・中公新書・2022年8月25日刊・297p・(石井氏は、京都新聞に連載中)

二〇三五年±五年。異次元の広域超巨大地震に向かいつつある今日、百年前の震災を、大正の文豪・作家・ビジネスマン・行政機関の責任者が、見て・体験したことを、手記・証言として物語る巨大災害の記録から学ぶことは有意義です。一番驚いたことは、多くの文豪・作家などが、朝鮮人虐殺に関連して、風評に惑わされず、冷静に、批判的に書き残していたことです。特に、中西伊之助・吉野作造・佐多稲子の文章が強く印象に残りました。別の視点、今日に通じるのは①ビジネスリーダーの立場から、帝国ホテルの犬丸徹三氏の、現状を打開する確で、具体的な指示を次々実行に移す行動は、素晴らしい判断力・指導力と深く同意できます。②河野一郎氏が、小田原から東京へ自転車で駆け付け、祖母と妹と恩師の安否を確かめるとともに、現場から将来に向けて、農家建築のありようの改善に思いを致し、且つ、既に始まっている忘却への危機感を覚え、その後、新潟地震非常災害対策本部長に就任した時感じた、重視すべき「地盤」の重要性への着眼、流言から学ぶ正確な情報管理と治安の確立、それ以上に「行政機構の中心を、東京の外へ移すことは、緊急の課題となってきた」と断言しています。又、「後藤新平伯の都市計画が実現されていたら、今の東京は、全く様相を異にしていたに違いない。東京都の住居面積に対して、道路面積の占める比率の低さは、世界の先進國中、最低である。……幅を二倍に広げた

としても、一流国の足元にも及ばないのだ、平常でも麻痺状態に近い東京の交通事情が、一度大災害が起きた場合には、どのように混乱するであろうか。……四十年前とは比較にならない程文化が進んでいるとはいえ……前とは全く異質の、しかも深刻な混乱が予想されるのである。……新潟大地震は、忘れっぽい日本人に対する警告の意味を持っている。」その発言からさらに六十年後の今、地方創生と言えげうほど、東京一極集中が進んでしまった現在、慄然とする思いです。

「死者・行方不明者一〇万五千人、全壊・焼失家屋五七万戸、被災者総数三四六万人」必ず来る異次元の広域超巨大地震への備えを、政府・自治体は勿論、私たち住民も自助と特に近くで助ける「近助」への備えを格段に高め、広めたいものである。一読をお薦めします。(中本学)



10.19 学習・交流会報告

今回のテーマは大躍進運動と人民公社でした。一九五七年開始の「反右派闘争」により、毛沢東に反対する勢力は一扫され、批判的な意見は言えなくなるような雰囲気为中国を覆うようになった。五八年五月、中国共産党第八回大会第二回会議が開かれ、農業・工業の生産力向上のスピードアップが図られた。これは、第八回大会の決定を逆転させるようなものだった。この背景にフルシチョフの「工業・農業生産で十五年以内にアメリカを追い越す」という演説に刺激された毛沢東が「十五年以内に英国を追い越す」という方針を打ち出したことがある。五八年の鉄鋼生産を五七年実績の二倍を目指すという、根拠のない夢想(妄想)は量的には達成されたものの、その内三十%は土法高炉など旧来の製法によるもので、使い物にならなかった。それどころか、農民が鉄生産やダム建設に大量に動員されたので、農業にも大きな打撃を与えた。五九年夏の廬山会議で彭徳懐が毛沢東に、手紙で直言したが、毛は激高し反革命と決めつけ、多数の幹部が処分された。それ以後は下級幹部も虚偽の報告を送り続けた。農業では深耕密植が勧められたが、大失敗に終わったにも関わらず、稲穂の上に幼児を乗せるなど、捏造で事実を隠へいした。諸々の誤った政策の結果、「大飢饉」による餓死者、病死者等は2000万〜6000万人にのぼると言われている。詳しい内容を知りたい方は、ディケーター(ロンドン大学教授)の「毛沢東の大飢饉」(草思社文庫2019.8)を読むことをお勧めする。地方の档案館と当事者へのインタビューに基づく書は、迫真の事実を教えてください。(川村)

次回は、十一月十六日(木)午後一時半府連事務所です。どなたでもお気軽にご参加ください!

展覧会「你好！小朋友」を見て

先日、青艸堂ギャラリー（上京区西洞院中立売上る）で十一月十九日まで開催中の秋山亮二写真展「你好！小朋友」を見に行ってきた。これは写真家の秋山亮二氏が一九八一年から八二年にかけて中国撮影家協会の協力のもとに北京、成都、広州、海南島、上海、蘇州、桂林、ハルピン、ウルムチ、トルファン、フフホトなどを訪問して撮影した中国の子供たちの写真八〇〇枚近くから選ばれた写真の展覧会である。一九八一年から八二年というと文革終結後、中国が対外開放し始めた時期に当たる。私自身このころに初めて訪中したので思い出深い時期である。まだまだ貧しくて、ホテルの水洗トイレはペーパーを流す代わりに傍らの竹編みの屑籠に捨てる、捨てるつもりで屑籠に入れてきたスリッパが忘れものとして帰りの空港まで届けられるような、素朴で貧しいが、善意にあふれた中国の旅は私も忘れることができない。

秋山氏はフィルム会社の社員として各地で写真を撮影したそうだが、中国側があらかじめセットしてくれる被写体よりも朝や夕方の方の散歩の途中、道端でふと見かける子供たちの姿に心惹かれて撮影することが多かったという。映っている子供たちは皆、伸び伸びとたくましく明日への希望にみちあふれて見える。秋山氏の写真集「你好！小朋友・中国の子供達」は一九八三年に出版されたのだがその後、二〇一九年に復刻版が中国で出版されるや大きな反響を呼び、二〇二〇年には第二部「光景宛如昨」が、二〇二二年には第三部「往事成追忆」が出版されたとのことである。

被写体となった子供たちは今や四十代に差し掛か

り中堅世代となっているが、彼らのその後の人生をたどる試みも開始されているとの事だ。人々が利益の追求に血眼になる高度成長期以前のこの時代は中国の人々にとっても古き良き時代としてふりかえられているのだなと感慨深いものがある。

（橋本草子）



2024年

中国の悠久の旅カレンダー
好評発売中！ 1200円

（送料 350円）

中国の美しい風景写真のカレンダー
書店では販売していません。
ぜひお買い求めください。

※ご注文は府連事務所まで

★事務局より★

★京都府連のホームページが新しくなりました。HPアドレスは、nichukyoto.comです。

★8月から事務局のお手伝いをしている田邊直美さんをご紹介します。

昭和37年生まれ、61歳の京女、田邊直美と申します。

私が、事務局に入ってお手伝いをするようになって感じた事は、中国と日本は仲良くしてるのが一番だということです。同じアジア人同士は仲良くするべきだと感じています。核、戦争は絶対反対です！

人種が違うから、考えや、価値観等、異なる事も多々あると思いますが、お互いの国の政治家さん達が、譲歩しあえる所は譲歩し合って、よく話し合い、お互いのアジア諸国として、どうしたら、お互いの国が良くなるか、少しでも、みなで、幸せに平和に暮らせるかを、沢山話し合いをし、権力で抑え込むのではなく、笑顔で握手🤝出来る関係性を持って欲しいと、切に思っております。

中国の子供達の笑顔も、日本の子供達の笑顔も、最高にステキです❤️

私達が居なくなっても、安全に安心して両国の子孫達が笑顔で生きて行ける友好な関係を築いていきたいものですね❤️